
日常な非日常。

水無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常な非日常。

【Nコード】

N5264Z

【作者名】

水無月

【あらすじ】

入学初日から、生徒会と風紀委員のメンバーに目をつけられることとなった、黒主鴉紀。平凡で目立つことなく学校生活を送りたい。そんな望みはかなうのか。

はじまり・・・

「続いては、風紀委員からです。風紀委員長、かいんはやく架院隼人さん、副委員長、あかいしじん赤石迅さんお願いします。」

司会の男がそういうと会場が一斉にざわめく。

「かつこいい」

「やりてー」

「ちょーやべえー」

おいおい、ちょいちょい放送禁止用語が・・・

隼人と迅って言ったけ、そいつらがステージの上にあがると俺と同じ一年のやつらが危険な単語をぶちかます。

それもそのはず、今ステージの上にいる二人は眉目秀丽という言葉が似合いすぎるほど綺麗な顔だちをしている。そこまでは、いいけど・・・

なんで・・・なんで男が女子みたいな言動をするのか俺には理解できない。

「静かにしろ。」

シ

ン・・・

会場全体が静まりかえる。さつきとはちがい、一気に冷たい空気が漂う。

「風紀委員長、架院隼人だ。今から、守っておかなければならないことを言う。しっかり頭にたたきこんでおけ。」

きつい口調でそいつは言った。が俺には関係ない。どーせ、あいつともかかわることはないだろう。

「制服は着崩さない。チャラチャラしない。授業を抜け出さない。喧嘩しない。学校の評価をおとさない。以上、これらのことを守る

ように。守らないやつは俺が指導してやる。」

隼人は礼をするとステージをおりていく。

いやいや、今言ったこと一番守らなければいけないお前が守ってないとかそれはダメだろ。

それもそのはず、隼人はどっからどーみても、ヤンキーだ。うん、これはべつに守らなくてもなにも言われないだろう。

はじまり・・・（後書き）

へたくそですみません！！
温かく見守っていただけると幸いです。

はじまり・・・2

ステージの上に残された、迅はさわやかではない笑みを浮かべている、と思いきや、

「よーするにー、風紀を乱すなっってことだよねー。」

うん、説得力ね　な、この学校の風紀委員は、これなら別に裾だしたってピアスしたって何もいわれーな。　迅は、いかにもって感じの格好だ。ピアスはしていないが髪は少し長めで赤紫って感じの色。雰囲気はチャラチャラした感じ。

風紀委員なのにそんなんでいいのか？と思う。

そんなことを考えているうちに迅はステージをおりた。

「続いては、生徒会からです。生徒会のみなさんお願いします。」

・・・。

「「「「いやあああああああああああああ！！」「」」」」

??????

なんだなんだなんだ？男のむさくるしい声が体育館にこだまする。

すっごく気持ち悪い。鳥肌が・・・

俺は耳をふさぎながら周りを見る。みんなステージの上に釘付けだ。女子がおめえーらは。

そんなことを思いながら俺も前を見る。

うん。意味がわかったよ。おめえーらが騒ぐ理由が。

ステージの上にいるのは、美形、美形、美形、これまた美形。

くそ、この学校にはなぜこんなにも美形がそろっているのか・・・。

「俺たちが生徒会だ。」

美形の一人がそう言う。

「こんにちは。僕が生徒会の書記と会計をしているあかつきせんり曉千里です。よろしく願います。」

千里っていうやつは背が低く、目がくりくりしてて小動物みたいだ。
「やつぽー、みんな元気？副会長の遠矢拓人とやたくとだよー。盛り上がった
いこー。」

軽いかんじの拓人って人はチャラ男だな、ピアス多くね？

「最後に、俺が生徒会長の須藤瞬すどうしゅんだ。よろしく。」

うん。なんでこんなにもかっこいいやつあつまったのか不思議だ。

生徒会のメンバーは自己紹介だけするとステージを颯爽とおりていく。

挨拶だけでいいのか・・・ほかにやることあるんじゃないのか・・・
そうこうしてるうちにあっという間に入学式は終わった。

あとは、クラスでの自己紹介だけだ・・・。

こういうのは、はじめが肝心だ。この自己紹介でその先の俺の人生が決まると思っている。

大切に・・・平凡な人生を送るために・・・

成功させなければ・・・

はじまり・・・2（後書き）

つたない文章ですみません。

こんなものでよろしければどうぞこれからもよろしくお願いします。

はじまり・・・3

入学式がおわってみんな各々とクラスに向かう。ちなみに俺は11HRだ。

金持ち学園だけあって、体育館から教室までは結構ある。

特にやることがないから、後ろで会話してる男たちに耳をかたむける。

「いやー、ホントにかっこいいよなー、風紀委員と生徒会。おれ、副会長とやりてー。」

「俺は風紀委員長かなー。あの冷たい目で見られただけでいける。」

・・・

なるほどね、ここの学園はこんなやつしかいねーんだな。

そうか、なるほどね。ハハッ

そんなことを考えているうちに教室につく。

うん。広いね。すげーや。

なぜやりになつてきた俺は早く席に着きたくなつたから黒板に張つてある座席表を見る。

俺の席は・・・

「窓側の一番後ろか」

誰かとかぶった。

静かに後ろを向くとさっきステージの上にいた副会長がいた。ただど名前が分からない。

うーんと、えつと太郎？そんなダサくねーか・・・わっかんねな。

「遠矢拓人。お前俺の名前分かんなかったの？」

「うん。」

「こんなにかっこいい俺を・・・」

「拓人君、どうしたの?？」

「千里ー。俺の名前を知らないやつがいたー。」

「ホントにー!? 誰? 見たい。」

だんだんめんどくさくなつたから、俺は自分の席についた。
そして眠りにつく。

足音が聞こえてくる。

「おい。おきる。」

はじまり・・・3 (後書き)

へたくそですみません。

頑張りますのでお願いします。

はじまり・・・4

「おい、おきろ。」

遠矢拓人でもなく暁千里でもなくほかの男の声だった。

「やだね。」

俺は、負けないように言った。

「ほう、俺に抵抗するなんていい度胸してんじゃん。」

男は楽しそうに言った。

「ねえー、瞬、俺の名前こいつわかんなかったんだよー。どう思う
く??？」

遠矢拓人もこっちに来た。

「僕も顔を見たいんですー。」

暁千里もきた。

「お前、黒主鴉紀だろ。お前の秘密今こここで言ってやってもいいんだよ?」

「ひっ!」

それだけはやめてくれー。

あつ、自己紹介が遅れたな。
俺は黒主鴉紀。

実は、高校2年だったりする。(笑)

みんな一年だと思っただろ。

それがちがうんだなー。

なんだかんだあって、引っ越してきたけど、行く高校が決まっ
てなかったから

俺のおじさんがやってるココ赤明学園しゃへいにはいったわけだ。

さっき、男が言った秘密というのは、

俺はヤンキーだってことだ。元ヤンだ。

しかも自分で言うのもなんだが世界一強いといわれていた最強のヤンキーだ。

なんか自分で言っ
てて照れる(笑)

しかし、ヤンキーのままだといろいろめんどーだから

へんそうしているってわけだ。

もともと、赤紫っぽい髪色だけど今は黒のかつらでダメメガネをしている。

まあ、こんな感じではれたらいけないのである。

「それだけは、やめてください・・・。」

俺は変に逆らうと危ないと思ったから、起きた。

「「「!?!?!」」」

俺は、あくびとばれることの恐怖からすこし涙目になっていた。
われながら情けない

だけど、今、おれの目の前にいる3人は、
目を見開いたまま固まっている。

やばい、かつらがとれたとか！？
あたふたしている俺に3人はいった。

「黒主鴉紀！（くん）お前に（君に）きめた！（きめました）」

はじまり・・・4（後書き）

へたつくそで申し訳ございません。

次回は、説明です。

いろいろ、設定をかくのでござんください。

説明（前書き）

今回は、物語ではありません。

説明

黒主鴉紀 2年生。春に転校してきた。

今は、黒のかつらに黒ぶちのだてめがね。

それをとると、赤紫の髪（天然）。

容姿は綺麗でかわいい？とにかく美形。しかし、無自覚なのである。

身長は、少し小さめ？

須藤瞬 生徒会長。美形。めんどくさがりや。

遠矢拓人 生徒会副会長。美形。ピアスごっこつ。チャラ男

暁千里 生徒会会計と書記。美形。かわいい。鴉紀にたいしてはヤンデレ？

架院隼人 風紀委員長。美形。鬼。

赤石迅 風紀委員副委員長。快樂主義者。

登場予定

藍堂零牙 その他もろもろ。

設定。

鴉紀は、春に赤明学園の2年生として転校してくる。

元ヤンとあつて変装中。

生徒会が2年なのは、ご想像におまかせします。

とにかくみんな2年生という方向で。藍堂以外は。

その他、???というところがあったら、まあ、自分なりに解釈を
していただけると幸いです。
他人任せですみません。

とりあえず、こんな感じです。

また付け足すことがあるのでその時はまた、ご覧になってください。

はじまり・・・5

「はあ???なにが」

俺はいきなりのことです惑う。

「今日からお前は生徒会のメンバーだっていうことだ。」

わけがわからない。

「僕、書記と会計をやってるから、鴉紀くんは会計をやってもらうね。」

わけがわからない。

「俺、マジでお前このみだわ。」

わけがわからない。いや、マジで。
と、いうわけで拒否しようと思います。

「いやだ。」

「なぜだ。」

「どうしてもだから。」

俺の秘密を知ってるやつなんかと一緒にいたくない。気持ち悪い。

「だいたい、なんでいきなり俺が生徒会にはいらなきゃならないんだよ。まだ、この学校のことだって全然知らねーし、そんなに生徒会とか馬鹿だろ。」

「そんなのカンケーねーよ。」

「そうですよ。僕は鴉紀君がいれば絶対に楽しくなると思ってます。」

こいつら絶対にひくきないな。

こういうのはその場しのぎにしかないけど・・・

「わかった。少しかんがえさしてくれ。」

「わかった。」

「オツケー」

「分かりました。」

よし。とりあえず助かった。

「安心するのはまだ早いぞ。」

「なんで??」

お前の周りは、俺らだからな。

「そんなあああああ!!」

よく見ると、俺の隣は、遠矢拓人、前二つは、須藤瞬と曉千里だ・・・。

泣けてくる・・・。

そんなことをしているうちに、さらなる悲劇が。

「なあゝにやってんのぉー？」

「さわがしいぞ。」

こいつら、さっきの風紀委員じゃねえーかよー。

こいつらも同じクラスなのかぁ！？

助けてー！

「おっ！！子猫ちゃゝん発見！」

俺のことか？ちがうな・・・

でも、だんだん近づいてくる・・・

へちゅッ

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

「いやあああああああああああああ！！！」

気持ち悪い。吐き気があー！！

俺は素早く口をぬぐった。

「ぺっ、ぺっ・・・なにするんだよぉ！このおたんこなす！！！」

「そんなこといわなくなたっていいじゃん。ブー。」

赤石迅はそう言うが・・・

「俺の・・・ファースト・・・キ・・・キ・・・ス・・・が・・・男・・・

だ・なんて・・・」

そのまま俺は意識を手放した・・・

はじまり・・・5（後書き）

なんかホントにすみません。

へたくそで申し訳ないです。

あと、セリフ誰がだれだかわかりませんよね・・・。
いちおう、

鴉紀は、普通なかんじで、須藤瞬は「く」だ。「みたいなかんじで遠矢拓人はチャライかんじ、暁千里は、敬語、架院隼人は、怖いかんじ？赤石迅は、軽いかんじです。わかりにくいとおもいますが、頑張ってください。私も、がんばりますのでよろしくおねがいします。

危機（前書き）

あけましておめでとございます。
今回はすこし短いと思います。

危機

目を覚ますとそこは、すごかった。

なんかシャンデリアみたいなのがぶら下がっていた。

そーいえば俺、あのあと気絶したんだよねー。

・・・。ってことは、自己紹介終わった・・・？
まじか・・・。

「俺の人生おわったあああああああ！！！！！」

嘘だ。これじゃ、目立つじゃねえか、明日学校行きたくない。
嫌だ、嫌だ、嫌だ。

「目覚めましたか？」

ひょこつと顔を出したのは、暁千里だ。

「ここはどこだ？」

「鴉紀君の部屋ですよ。」

「俺の部屋？」

「はい。ちなみに、僕たちと同じ部屋ですよ！」

「そうか・・・ってなんで！！」

「だって、鴉紀君生徒会なんだから僕たちと同じに決まってるじゃないですかー。」

「俺はまだ入るなんていつてないぞ！！」

なんて乱暴な奴らなんだ。絶対に入らない。入りたくない！！

「つまらないなあー、鴉紀君。僕は君がほしいんです。」

？曉千里の雰囲気が変わった。

「君のその口から、生徒会に入ると言わせてあげますよ。」

そういうと、曉千里は、こっちに近づいてくる・・・

あっ、ちなみに俺はベットのの上にいるよー

「俺は、絶対に言わない。」

「へえー、そうやって言ってられるのも今のうちですよ。フッフ」

チュッ

「は!？」

「これは、消毒です。さっき、迅君にキスされたでしょ?」

「だからってなんでまた!!キスなんか!!」

「なんでって、あなたが好きだからですよ」

ドサッ

そう言うなり俺を押し倒す。なんか、怖い。

「いや・・・だ・・・」

「かわいいですよ。」

危機（後書き）

はい、来ましたよ。初めてなので、表現とかボロボロだと思いますがよろしく願います。

一体、どうなるんでしょうねー！。

危機 2

千里は、俺を押し倒すと同時に俺の服を脱がした。

「や・・だ」

「なんでですか？かわいいですよ。」

裸になった俺をじっくりとみてる。

「真っ白ですね。まるで雪のようです、でもここはピンクでかわいいですよ。」

そういうと、俺の突起を舐めた。
ピチャといやらしい音をたてる。

「やあ・・・やめ・・て・・あ」

おかしい、俺の声じゃない

「あ、そういえば」

千里はなにか思い出したようにベットを後にする。

俺は今のうちだと思い、逃げようとするが、

「逃がしませんよ。」

口は笑っているが目は笑っていない。

そんな千里に恐怖を覚える。

そうこうしているうちに俺はベットにひきづりこまれた。

「もう、やめてくれよ！俺は何が何でも生徒会になんてはいらなう

ぐっ。」

俺を押し倒すと千里はキスをしてきた。

千里は俺の唇を舌でこじ開けようとするが俺は負けじと口をかためる。

が、人間には酸素が必要だ。俺は息を吸おうと少しだけ口をあけた・

・
間違いだった・

すばやく千里の舌が俺の口内に入ってくる、

「ふぁ・んっ・ん・ん・!？」

舌じゃないものが俺のくちの中に入ってきた。

ごくっ

一瞬のことではわからなかったが

多分、俺は薬らしきものを飲まされた。

のんだことを確認した千里は、俺の口から離れる。

「はぁ・はぁ・なに・をし・た」

息が切れている。あれ、俺こんな弱かったけ・

「気持ちよくなれる薬ですよ。鴉紀君があんまり言うことをきいてくれませんかからお仕置きです。」

そう言うのにこりと笑う千里。

俺は、寒気を感じたのもつかの間、
体が熱くなってきた。

「はあ・・・はあ・・・、あ・・・つい・・・」
「おや、もう効いてきたんですか。」

千里は冷酷な笑みを浮かべた。

危機2 (後書き)

はい、すみませんでした！！

グダグダだし、へたくそだし自分で書いてもうやめようか思っていました。

でも、頑張ります。

あ、ちなみにこの話は私の好きな方向にもっていきますので、どうぞよろしく願います。次もこんな感じなんで、「へたくそだなー」と笑って見過ごしてくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5264z/>

日常な非日常。

2012年1月14日17時45分発行